



前橋女子高
ギター・マンドリン部

小原里咲さん

日吉町四丁目・17歳

マンドリンの音色好き

前橋女子高ギター・マンドリン部でマンドリンフェスタに出演。コンサ

ートミストレスとして、萩原朔太郎の詩「こころ」から着想を得て作られた、アニメ映

画の挿入歌「テルーの唄」などを弾きました。
中学生のころ、朔太郎は詩人とし知らなかったのですが、高校の部活で朔太郎のマンドリンの孫弟子に当たる両角文則先生から指導を受け、朔太郎が楽団を編成し活躍していたことを知りました。

マンドリンの魅力は繊細できれいな音色。一年のときは楽譜どおりに弾くことだけで精一杯でしたが、だんだん技

術も上達し、みんなで曲を仕上げていくことを楽しめるようになっていきました。
放課後は毎日、一時間半の練習をしています。コンサートミストレスは指揮者とのコミュニケーションを密に取りながら、演奏者全員へ伝え、ハーモニを奏でることが大切。そのために、普段から練習中には部員たちの意見調整も図って、みんなの気持ちをまとめることによって、本番でよい演奏ができるように頑

さまざまな分野で優れた才能を 誰よりも鋭敏な目と耳、独特の感性を持った表現者



手品の道具はトランプだけが残っています

晩年は特に熱中した

不器用な手先にもかかわらず

二十代のころから手品に興味を持っていましたが、熱中したのは晩年になってからのことでした。「東京アマチュアマジシアンズ倶楽部に正式入会できたときは子どものように喜んでいた」と、娘の萩原葉子さんが著作『父・萩原朔太郎』の中でその記憶を記しています。

特に、五本の指に赤い玉を挟み、その数を増やしたり減らしたりする手品、トランプや時計、ハンカチなどを使っ

手品

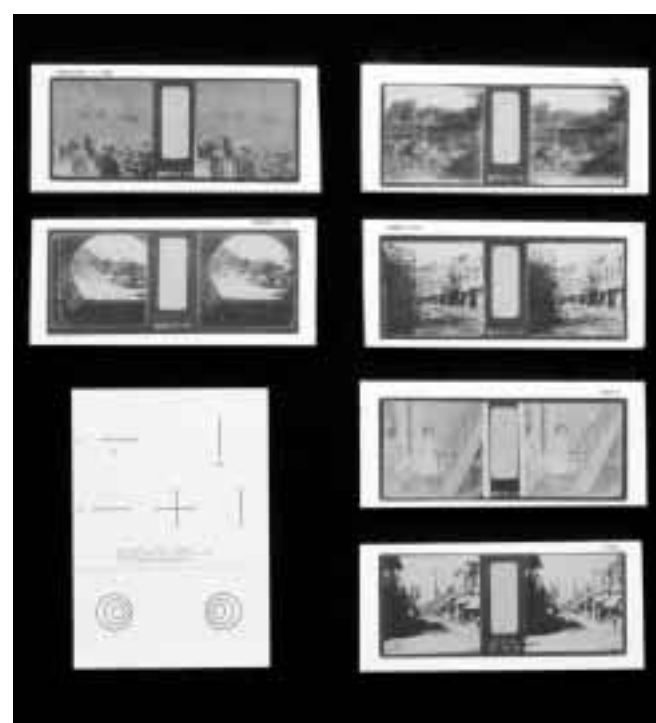
前橋文学館に朔太郎自身が撮影した風景写真や人物写真など、百点ほどが保存されています。高価だったカメラを手に入れ、中学三年のころから写真を撮り始め、晩年まで撮影を続けていました。

写真に残された明治・大正・昭和時代の風物は、それ自体に歴史的価値があります。しかし、何といても「詩人の目」による視点が百年もの時を超えて、今に伝えられてい

ノスタルジアを追い求める ステレオカメラ使い

写真

ることに大きな意義があるでしょう。



立体写真とその見方の解説



愛用のギターと長女へ贈ったマンドリン

詩作に大きな影響も

青年期はマンドリンに没頭

音楽

小さいころから音楽が好きで、当時はなかなか手に入らない、オルゴール、ハーモニカ、アコーディオンを欲しがりました。
中学卒業時には陸軍の楽隊に入りたいと本気で考え、高等学校中退後は、国内に三つしかなかったといわれるマンドリンを手に入れました。わが国の先駆者である比留間賢八に師事し、音楽家を目指すほど熱中。自ら楽団を結成し

て、指揮者を務めながら広く活動していたことは前述のとおりです。また、高価なレコードや楽譜を買い集めるなど、音楽に情熱を燃やす青年時代でした。
後年、「青年期は音楽のために時間を空費した」と自らを振り返っていますが、独特の韻律による口語詩を確立させたことは、こうした青春時代の経験と無縁ではないでしょう。